

パウル・ティリッヒ研究 (Ⅷ)

—「存在 (being)」について—

森 田 美千代

I 問題の所在

II ティリッヒにおける「存在 (being)」

- (i) 存在の基本的な構造
- (ii) 存在の特徴と、存在の認識の範疇
- (iii) 存在の基本的な構造を構成する諸要素

III 教育に示唆する諸点

I 問題の所在

パウル・ティリッヒが発表したほぼ著作順に、パウル・ティリッヒ研究 (I) においては「境界線 (boundary) について、(II) においては「不安と生きる勇気」について、(III) においては「愛・力・正義」について、(IV) においては「究極的なかかわり (ultimate concern)」について、(V) においては「深さ (depth)」の概念について、(VI) においては「不安や病とその克服としての救い」について、(VII) においては「理性 (reason)」について、今まで考察してきた。今回は、「存在 (being)」について、考察を深めたい。(前回の「理性 (reason)」について、そして、今回の「存在 (being)」について、さらに、その後は、「実存 (existence)」について、「生 (命) (life)」について、「歴史 (history)」について、と考察を進める予定である。というのは、なんといっても、ティリッヒの、研究の集大成である『組織神学 (Systematic Theology)』を避けて通るわけにはいかないからである。逆のいいかたをすれば、ティリッヒには膨大な著作があるが、『組織神学』をおさえておけば、ティリッヒの思想 (哲学、神学を含む) をそれほどまちがえて理解することはないだろうと思えるからである。従って、当分の間は、

『組織神学』が考察の対象になるということになる。

テキストを読む視点および本研究のねらいは、前回までと同様に、今回においても、(1)まずティリッヒの文脈に即して読み考えること、(2)人間の問題、教育の問題、キリスト教教育の問題へのティリッヒの貢献と示唆を掘り起こすこと、である。力点としては後者にある。

さて、私は教育をどのようにとらえているか、その定義を、最初に提示しておきたい。私は、教育は、人間が学ぶことを通して人間になることに、他の人間がかかわることである、と考えている。

従って、私の教育の定義とパウル・ティリッヒ研究において私の中で底流しているねらいとの関連から、今回のパウル・ティリッヒ研究 (Ⅷ) において、主として取り扱うことになることをやや具体化するというとすれば、ティリッヒの「存在 (being)」の概念によって (ティリッヒの「存在論 (ontology)」によって)、教育における、キリスト教教育における、人間存在のありようを少しでも明確にすることであるといえよう。

テキストとしては、『組織神学 (Systematic Theology)』の第一巻 (1951年) のパートⅡの「存在と神 (Being and God)」を主として使用する。

Ⅱ ティリッヒにおける「存在 (being)」

ティリッヒが「存在 (being)」についての考察をどのようにしたか、つまり、ティリッヒは存在論 (ontology) の課題をどのように考えていたかは、彼自身も述べているように、次の三つに、まとめることができるように思う。それは、(i) 存在の基本的な構造 (the basic ontological structure)、すなわち、自己-世界構造 (the self-world structure) を考察すること、(ii) 存在の特徴 (the characteristics of being) と、存在の認識の範疇を明らかにすること、(iii) 存在の基本的な構造を構成する諸要素 (the elements which constitute the basic structure of being) を考察すること、である。

以下、この順序に従って、一つずつ、みていきたい。

(i) 存在の基本的な構造 (the basic ontological structure)

ティリッヒは、存在の基本的な構造は、自己-環境構造 (the self-environment structure) であり、特に人間存在の場合は、その基本的な構造は、自己-世界構造 (the ego self-world structure) である、ととらえている。

まず第一に明確にしておかなければならないことは、自己-環境構造であれ、自己-世界構造であれ、存在するあらゆる存在者の基本的な構造は、どちらか一方の極がなくなれば、その極だけがなくなるということにとどまらないで、いっしょに両極がなくなるということである。それはティリッヒの次のようなことばで明らかである。「もしもいずれか一方の極が失われるならば、⁽¹⁾両極とも失われる。世界なき自己は空虚であり、自己なき世界は死である。」

上述のことを確認したうえで、第二に、ティリッヒの存在の基本的な構造としていえることは、自己-環境構造であれ、自己-世界構造であれ、存在するあらゆる存在者の基本的な構造は、自己-環境における、自己-世界における、相互依存性 (interdependence) である。ともすれば、存在者のなかで、人間でないもの (non-human being) といおうか、人間以下のもの (sub-human being) といおうか、そういう存在者は、環境 (environment) が自己 (self) を決定してしまい、一方人間 (human being) の場合は、環境 (世界) の影響は全然こうむらないで存在し続けると考えやすいが、そうではなくて、人間であれ、人間以外の存在者であれ、存在しているあらゆる存在者は、自己と環境 (世界) との間には、相互依存性があるといえるのである。このことでどういふことを私がいおうとしているのかといえば、環境が存在者を全くのみこんでしまうような環境ものみこまれてしまうような存在者も存在しないし、逆に、環境を全く除外できる存在者も除外されてしまう環境も存在しないということである。そのことを、ティリッヒの次のことばは、特に明確にしているといえる。「同一の限られた空間内のそれぞれ異なった存在者は、それぞれ異なった環境をもっている。 (Different beings within the same limited space have different environments.) 存在者はその環境に属するとはいえ、存在者それぞれは環境をもっている。環境のみによって一存在者の行動を説明しようとするすべての学説の誤りは、それら学説が、このような環境をもつ存在者の特性の観点からは、環境の特性を説明することができないという点にある。自己と環境とは互いに規定しあうのである。」(Ap. 170, A'p. 233 傍点は引用者による。)

それでは、自己-環境構造であっても、自己-世界構造であっても、あらゆる存在者は、その存在者間に、ちがいはないのであろうか。例えば、人間存在と人間以外の存在との間において、ちがいはないのであろうか。前述し

たように、あらゆる存在の基本的な構造は二極があるということ、そして、その二極間には相互依存性があるということで、あらゆる存在者の存在論的構造を述べつくしたことになるだろうか。そうではない。ティリッヒは、存在者のなかでも、人間存在と人間以外の存在例えば動物存在とか植物存在とかでは、大きなちがいがあるといふ。それは、人間存在の場合は、自己-世界構造をなしており、人間以外の存在の場合は、自己-環境構造をなしているという。

では、自己-世界構造と自己-環境構造とのちがいは、何なのであろうか。ティリッヒは、「自己 (self) という用語は自我 (ego) という用語よりもさらに広い意味をもっている。」(Ap. 169, A'p. 232) といひ、従って、人間存在の基本的な構造を the ego self-world structure といひ、人間以外の存在の基本的な構造を the self-environment structure といっているが、ここで大事なことになるのは、世界 (world) と環境 (environment) とのちがいということになるであろう。なぜ人間存在は、自己-世界構造なのであろうか。それは、ティリッヒによれば、人間は環境 (environment) を超越する (transcend) ことができるからである。人間は、必ずしも完全に、環境に制約を受けることはないからである。「人間は、自我-自己 (ego-self) をもつが故に、あらゆる可能な環境を超越する (transcend)。」(Ap. 170, A'p. 233) 「世界は、すべての環境を、包みまた超越している、構造的全体である。人間が人間である限り、人間は決して完全に環境に拘束されることはない。人間は、常に、環境を把握し形成することによって、環境を克服する。人間は、その最も制限を受けた環境においても、宇宙を所有する。すなわち、人間は世界をもつのである。(The world is the structure whole which includes and transcends all environments. As long as he is human, man never is bound completely to an environment. He always transcends it by grasping and shaping it. Even in the most limited environment man possesses the universe; he has a world.) (Ap. 170, A'p. 234) (例えば、私達は、最も制限を受けた環境においても宇宙を所有することができた例として、フランクルの『夜と霧』を思い出すことができる。) そして、ティリッヒは、人間が環境を超越し、世界をもつことができることを示しているものとして、言語 (language) をあげている。「言語は、人間がその環境を超越する、すなわち、世界をもつ、ということの基本的表現である。自我-自己は、語ることで

き、また語ることによって、いかなる所与の限界も突き破る、自我—自己である。(Language is the basic expression of man's transcending his environment, of having a world. The ego-self is that self which can speak and which by speaking trespasses the boundaries of any given situation.)」(Ap. 170~p.171, A'p. 234) (言語の問題については、これ以上たちいらしないで、別の機会に、考察してみたい。)

以上、私は、存在の基本的な構造として、対極性 (polarity) について、相互依存性 (interdependence) について、そして、特に人間の場合は、環境を超越する (transcend) ことができることについて、述べた。

(ii) 存在の特徴 (the characteristics of being) と、存在の認識の範疇
ティリッヒは、存在 (being) の特徴を、一言でいえば、有限性 (finitude, finite) として、とらえている。「存在は、そのなかに無 (nonbeing) を含む。存在は、そのなかに存在自体と、それからそれに対立するものであるところの無とを、包括している。」⁽²⁾「無をそのなかに含むところの存在は、有限なる存在 (finite being) である。有限とは、その存在のなかに、存在しなくなるべき運命 (the destiny not to be) をになっている存在である。」⁽³⁾「無があるならば、有限性 (finitude) が出てき、また不安 (anxiety) も出てくる。もし無が存在それ自体に属しているというならば、有限性と不安も存在それ自体に属しているといわざるをえない。」(Bp. 180, B'p. 195)

存在しているものはどのようなものであれ、そのなかに無 (nonbeing) を含む。従って、そのような存在の特徴を、ティリッヒは、有限性 (finitude) といっているわけであるが、具体的には、存在が有限性の性格を有しているとは、時間 (time) の観点からいえば、人の一生にははじまりがあり、誕生した後は、生の中に死が含まれつつ、つまり存在を否定するような非存在 (無) の力を含みつつ存在し、そして、ついには、完全に非存在の力が存在の力を圧倒する死に直面するということになろうし、空間 (space) の観点からいえば、ここに (here) 存在するということはあそこに (there) 存在することはできない、ということになるし、最も徹底した形では、空間において存在しなくなることをすなわち死を避けることはできないということになろう。

これまで有限性について述べてきたが、ティリッヒは、その有限性に気づいている状態を不安の状態であるととらえている。そのことは、ティリッヒ

の「自覚された有限性は不安である。(Finitude in awareness is anxiety.)」(Ap. 191, A'p. 263)とか「不安は、有限な自己の有限なものとしての自己-自覚である。(Anxiety is the self-awareness of the finite self as finite.)」(Ap. 192, A'p. 264)ということばに明瞭にあらわされている。

不安については、パウル・ティリッヒ研究(Ⅱ)「不安と生きる勇気」において、また、(Ⅳ)「不安や病とその克服としての救いについて」において、述べたことがあるが、今回あらたに明確にしておきたいことは、不安(anxiety)の概念と恐怖(fear)の概念とのちがいである。不安は対象(object)がなく存在論的概念であるのに対して、恐怖は対象があり心理学的概念である。そのあたりのことを、ティリッヒは次のように述べている。「不安は、非存在の脅威だけに依存している。(略)不安の対象は虚無(非存在)であるが、虚無(非存在)は一つの対象物ではありえない。対象物であるなら恐れられることができる。危険、苦痛、敵は、恐れられるが、しかし恐怖であるなら、行為によって克服されることができる。(Fear can be conquered by action.)しかし、有限な存在は、その有限性を克服できないから、不安は行為によって克服されることはできない。不安というものは、しばしば潜在している(latent)とはいえ、常に現臨している。(present)それ故に、恐るべきものが何もないような状況においてさえも、不安は、どの瞬間にも、顕現する(manifest)ことができる。実存哲学、深層心理学、神経学、芸術、の総合的努力による不安の意味の回復は、二十世紀の功績中の一つである。一定の対象に関連している恐怖と、有限性の自覚としての不安とは、徹底的に異なった二概念であることは明瞭となった。不安は存在論的であり、恐怖は心理学的である。(Anxiety is ontological; fear, psychological.)不安は、有限性を内部から表現するから、存在論的概念である。(Anxiety is an ontological concept because it expresses finitude from inside.)」(Ap. 191~p.192, A'p. 263~p.264)

次に、存在の有限性を認識する範疇について述べることにする。ティリッヒは、存在の認識の主たるカテゴリーとして、時間(time)、空間(space)、因果性(causality)、実体(substance)の四つをあげ、それぞれのカテゴリーを、世界(world)との関連においてのみならず自己(self)との関連においても、考察しなければならぬとしている。つまり、上にあげた四つの範疇形式を通して(through the categorical forms)、世界と自己との基本構

造すなわち存在の有限性を、考察していくということであるといえよう。

時間 (time) は、存在の有限性の中心的範疇形式であるとしている。(Ap. 193, A'p. 266) 時間の範疇形式によって、存在の有限性を理解することは、私達にとっては比較的容易である。その最も徹底した姿が、死である。それは、死ぬことの瞬間の恐怖であるとともに、死ななければならないという不安において、私達は、有限性を自覚することができるのである。

「時間は、空間 (space) との結合を通じて、現在を創造する。」(Ap. 194, A'p. 268) 存在することは空間 (space) をもつことである。ティリッヒは、空間 (space) を、物理的空間 (a physical space) — 例えば、この身体、ある土地、ある郷土、ある都市、ある国家、この世界など— や、社会的空間 (a social space) — ある職業、感化の及ぶある領域、ある集団、ある歴史上のある時期、追憶や期待がある場所、価値や意味が構造化されたある場所など— を含むものとして考えている。(Ap. 194, A'p. 268) 空間の範疇形式によって存在の有限性が明らかになるということは、存在が特定の場所をもち続けることができず、そして、結局は、あらゆる場所を失いそれとともに、存在自体が失われるということなのである。(Ap. 195, A'p. 269)

時間や空間と同様に、因果性 (causality) も不明瞭である (Ap. 195, A'p. 270) とことわりつつ、ティリッヒは、因果性を次のように説明している。「ある事物または出来事の原因についての問は、それ自身が存在するにいたる力 (power) をもたないことを前提としている。事物と出来事は自存性 (aseity) をもたない。この自存性は神についてのみ特徴的である。有限的事物は自己原因ではない。(Finite things are not self-caused.) 有限的事物は存在の中に投げ込まれている。(ハイデッガー)」(Ap. 196, A'p. 270) 存在するものは何であれ、自らのうちには自存性がない、自らは自らの存在の根拠 (原因) たりえないという、因果性の範疇形式を通して、私達はまた、存在の有限性を理解することができるのである。

存在の有限性を認識する第四の範疇形式として、ティリッヒは実体 (substance) をあげている。「因果性とは対照的に、実体は現象の流れの背後に横たわっているあるもの、比較的静止的かつ自己—含有的であるところのあるものを示している。(Substance points to something underlying the flux of appearances, something which is relatively static and self-contained.)」(Ap. 197, A'p. 272) と、ティリッヒは、実体 (substance) を

説明している。実体という範疇形式を通して、私達は、逆に、存在が、相対的には変化していくことに不安を感じ、絶対的には実体の消失すなわち自分が自分でなくなること、すなわち死ななければならないということに不安を感じるというありようを浮き彫りにされるといえるのである。(ここから、靈魂不滅 (an immortal substance of the soul) の願いが出てくることになる。)

以上、存在の特徴である有限性について、そして、有限性を自覚している状態としての不安について、さらに、存在の有限性を認識する、時間、空間、因果関係、実体、の範疇について述べた。

(iii) 存在の基本的な構造を構成する諸要素 (the elements which constitute the basic structure of being)

私は、(i) において、存在の基本的な構造は、自己—世界構造であると述べたが、その自己—世界構造を構成する諸要素として、ティリッヒは、(1) 個別化と参与との要素 (individualization and participation) (2) 力動性と形式との要素 (dynamics and form) (3) 自由と運命との要素 (freedom and destiny) の三つをあげている。

ここで明確にしておかねばならないことの第一は、対になっている要素 (pairs of elements) は、対極性 (polar character, polarity) があるということである。つまり、「各極は、それが暗に他の極に対応している限りにおいてのみ、意味深いのである。(Each pole is meaningful only in so as it refers by implication to the opposite pole.)」(Ap. 165, A'p. 226) 第二は、対になっている要素の両極間においては、相互依存 (interdependence) の状態にとどまらず、むしろ、緊張 (tension) の状態になりやすいということである。そのことは、「あらゆる両極性において、各々の極は、それぞれ他の対極によって支持されるとともに制限されている。(In every polarity each pole is limited as well as sustained by the other one.) これらの完全な均衡は、均衡のとれた全体を前提としている。けれどもそうした全体は与えられていない。有限性の緊迫の下に、両極性がそこにおいて緊張を帯びる特定の構造がある。(There are special structures in which, under the impact of finitude, polarity becomes tension.) 緊張は、統一内の諸要素が、互いに離れ去り、相反する方向へ行こうと試みる、傾向に、関連している。

(Tension refers to the tendency of elements within a unity to draw away from one another, to attempt to move in opposite directions.)」(Ap. 198, A'p. 274)とのティリッヒのことばに明確に示されている。その緊張状態を、人間が自覚している状態が、不安の状態ということになる。明確にしておかねばならないことの第三は、前者の要素、すなわち、個別性、力動性、自由は、存在の自己連関性 (the self-relatedness of being) をあらわしているし、後者の要素、すなわち、参与、形式、運命は、存在の依存性 (the belongingness of being) をあらわしているということである。つまり、前者の要素は、自己—世界構造において、自己への傾斜をなしており、後者の要素は、世界への傾斜をなしているといえるのである。

以下、順次に、対になっている要素を一つずつみていきたい。

(1)個別化と参与 (individualization and participation)

「個々の木の葉は、その葉に働きかけまたその葉によって働きかけられる、自然の構造と自然の勢力とに、参与する。」(Ap. 176, A'p. 241)と、木の葉の例をティリッヒはあげているが、いかなる存在であれ、例えば、植物であれ、動物であれ、人間であれ、存在は、環境または世界に参与している。だから、個別化と参与との要素は、いかなる存在においてもいわれうるのである。「個別化と参与とは、存在のすべての水準において、互いに依存し合っているのである。(Individualization and Participation are interdependent on all levels of being.)」(Ap. 177, A'p. 243) しかし、ここでは、存在者のなかでも、特に人間の場合を、とりあげることにする。それは、人格 (person) や交わり (communion) の問題が明らかになるからである。

「個別化が人格と呼ばれる完全な形式に達する時、参与は交わりと呼ばれる完全な形式に達する。(When individualization reaches the perfect form which we call a "person," participation reaches the perfect form we call "communion.") 人は生命のすべての水準に参与するが、彼が彼自身であるようなそうした生命の水準にのみ完全に参与する。人は諸人格とのみ交わりをもつのである。(He participates fully only in that level of life which he is himself—he has communion only with persons.) 交わりは、完全に中心をもった、また完全に個別的な、他の自己への参与なのである。(Communion is participation in another completely centered and completely individual self.) (略) どの個別も参与なしには存在せず、そして、どの人

格的存在も交わる存在者がいなければ、存在しない。(No individual exists without participation, and no personal being exists without communal being.) 十分に発達した個別的自己としての人格は、他の十分に発達した自己なしには存在しえない。(The person as the fully developed individual self is impossible without other fully developed selves.) (略) 他人格との出会いなしには人格は存在しない。諸人格は人格的交わりにおいてのみ成長しうる。(There is no person without an encounter with other persons, Persons can grow only in the communion of personal encounter.)」(Ap. 176~p.177, A'p.242~p.243)

しかし相手が、参与してくる時、当人にとっては、はじめは、相手の存在が当人に対する抵抗としてたちあらわれてくることになる。その時、自己には二つの道がある。他者と交わりに入るか、あるいは、他者を征服するか、のいずれかである。相手と交わりに入ることは、相手を他者(人格)として認めることであり、そのことは、自己も人格でなければそのことはできないし、そして、そのことは、自己を人格にすることでもある。しかし、他者を征服する道をとれば、その時、他者の人格は、破壊されることになるのである。そのあたりのことを、ティリッヒは、「もし自己が他の自己の抵抗に出会わないならば、あらゆる自己は、自身を絶対化しようと試みるであろう。(If he did not meet the resistance of other selves, every self would try to make himself absolute.) 個別は、この抵抗を通して、自分自身を見出す。他人格の抵抗において人格が生まれる。(The individual discovers himself through this resistance. In the resistance of the other person the person is born.) しかし、他の自己の抵抗は無制約的である。一個別は対象の全世界を征服することができるが、他人格を征服すれば、必ず人格としての相手を、破壊する。(But the resistance of the other selves is unconditional. One individual can conquer the entire world of objects, but he cannot conquer another person without destroying him as a person.) もしも個別が他人格を破壊することを欲しないならば、彼はその他者と交わりに入らねばならない。(If he does not want to destroy the other person, he must enter into communion with him.)」(Ap. 176~p.177, A'p.242~p.243)という。(説教集『永遠の今』においては、他者を征服する時、他者の人格はもちろん破壊されるが、そのみならず、自らの人格も破壊される、とティ

リッヒはいつている。⁽⁴⁾ 自らの人格を破壊しないでは、相手の人格も破壊できないのである。)

(2)力動性と形式 (dynamics and form)

ティリッヒは、存在の基本的な構造を構成する第二の要素として、力動性と形式との要素をあげている。

存在するものはなんであれ、存在する以上、形式 (form) をもつ。逆にいうと、形式を失うことは、存在しなくなることを意味する。このことはよく理解できる。では、力動性とは何であろうか。「力動性は、存在しているあるものとして考えられることはできないし、またそれは存在しないあるものとしても考えられない。(Dynamics cannot be thought as something that is; nor can it be thought as something that is not.) 力動性は、メー・オンであり、存在のポテンシャルリティであり、これは、形式をもつところの事物とは異なった非存在であり、また純粹の非存在とは異なった存在の力である。(It is the me on, the potentiality of being, which is nonbeing in contrast to things that have a form, and the power of being in contrast to pure nonbeing.)」(Ap. 179, A'p.246)と、ティリッヒは、力動性のことをいい、そして、それは、Böhme の Urgrund, Schopenhauer の will, Hartman や Freud の the unconscious, Bergson の élan vital, Schler や Jung の strife のようなものであるとしている。(Ap. 179, A'p.246)

この力動性と形式は、特に人間の場合には、植物の場合や動物の場合とちがって、生命力 (vitality) と志向性 (intentionality) であるということができ、とティリッヒはいう。「生命力とは、生ける存在に、生命と成長とを与える力である。(Vitality is the power which keeps a living being alive and growing.) 生命力は、新しい形式へ向かって生きていくあらゆるものにおける生ける実体の創造的衝動である。(Vitality is the creative drive of the living substance in everything that lives toward new forms.)」(Ap. 180, A'p.247)「人間の力動性、人間の創造的生命力は、無方向な、混沌たる自己—閉鎖的活動ではない。(Man's dynamics, his creative vitality, is not undirected, chaotic, self-contained activity.) それは、方向をもち、形式をもっている。それは、自らを超えて有意義な内容へと自らを超越する。(It is directed, formed; it transcends itself toward meaningful contents.)」(Ap. 180, A'p.248)つまり、ティリッヒのいう力動性 (dynamics)

とか生命力 (vitality) というのは、現在の形式をつきやぶって新しい形式をつくる衝動のようなものであるということができると思う。(混沌としたものではない。) そしてその衝動は、人間の場合は、すべての方向に開かれている。(すべての方向に開かれているということは、どの方向もとりにえないとか、混沌としているということではない。) 他の動物とか植物とかの場合は、人間の場合とちがって、自然的必然性の制限を受けている。「人間における力動的要素は、すべての方向に開かれている。(The dynamic element in man is open in all directions.) (略) 人間は、所与の世界を越えて、一つの世界を創造することができる。人間は、技術的領域と霊的領域を創造するのである。(Man is able to create a world beyond the given world; he creates the technical and the spiritual realms.) 人間以下の生命の力動性は、自然的必然性の制限を受けている。(The dynamics of subhuman life remain within the limits of natural necessity.) 力動性は、ただ人間においてのみ、自然を超越する (Dynamics reaches out beyond only in man.)」(Ap. 180, Ap. 247~p. 248) 人間の場合には、力動性と形式は、生命力 (vitality) と志向性 (intentionality) ということができるが、では、志向性とはどういうことなのだろうか。「志向性とは、意味ある構造に関連していることを意味する。(Intentionality means being related to meaningful structures.) (略) 志向 (性) とは、ある目的のために行為しようとする意志ではなくて、ある客観的に価値あるもの、との (また、これに対する) 緊張において生きることを意味する。(Intention does not mean the will to act for a purpose; it means living in tension with (and toward) something objectively valid.)」(Ap. 180, Ap. 248) このようにティリッヒはいうのだが、私には、形式と志向性がはたして置換可能な概念なのか、そうでないのか、いまひとつはっきりしない部分がある。存在者に力動性・生命力がおき、意味ある形式をもつあいだの緊張状態を志向性をもつというのか、どうか、このあたりのことについては、今後の課題としたい。

(3) 自由と運命 (freedom and destiny)

存在の基本的な構造を構成する第三の要素は、自由と運命との要素である。そして、この要素は、徹底した形においては、特に人間存在の構造を構成する要素であるといえる。最初に確認したように、この自由と運命との対の要素も、両極の相互依存性 (polar interdependence) をもつ。つまり、「人間は、

運命との両極的相互依存性においてのみ、自由をもつにすぎない (Man has freedom only in polar interdependence with destiny)] (Ap. 182, A'p.251) 「自由をもつ者のみが、運命をもつ。(Only he who has freedom has a destiny.) 事物は自由をもたないから、運命をもたない。(Things have no destiny because they have no freedom .) (Ap. 185, A'p.254)

そのことを確認したうえで、さて、自由は、ティリッヒによれば、次のようなものとして経験されるという。「自由は、熟慮、決断、および責任として経験される。(Freedom is experienced as deliberation, decision, and responsibility.) これらのことばのそれぞれの語源は、示唆的である。熟慮とは、論証と動機を考量する行為を指示している。(Deliberation points to an act of weighing argument and motives .) (略) 自己-集中的人間は考量し、自分の人格的中心を通して、諸動機の抗争に対して、全体として反応する。この反応は、決断と呼ばれる。(The self-centered person does the weighing and reacts as a whole, through his personal center, to the struggle of the motives. This reaction is called "decision.") 決断ということばは、切断という表象をもっている。決断は、諸可能性を切断する。(The word "decision" involves the image of cutting. A decision cuts off possibilities .) (略) 責任ということばは、自分の決断について尋ねられるならば、応答する自由をもつ人間の義務を指示している。(The word "responsibility" points to the obligation of the person who has freedom to respond if he is questioned about his decision.)」(Ap. 184, A'p.253)従って、熟慮、決断、責任は、一連のことであり、自由は、実際には、このようなものとして、行使される。

運命は、人間に何が起きるであろうかと決定する異質的な力ではなく、人間の自由の基礎であり、自由の制約や制限となるのである。(Ap.185, A'p.254)

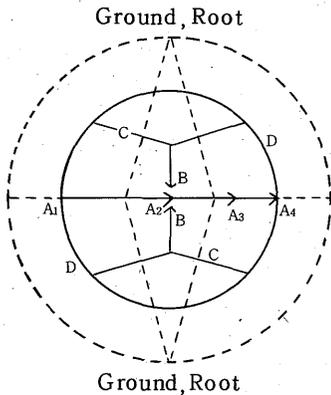
従って、自由は、運命に制約を受けるが、その自由はまた、運命を形成していくものでもある、ということができる。

以上、私は、存在の基本的な構造を構成する諸要素としての、個別化と参与、力動性と形式、自由と運命について、述べた。

Ⅲ 教育に示唆する諸点

以上のような、ティリッヒの存在論から、教育における、キリスト教教育における、人間存在のありようについて、いかなる示唆が与えられるであろうか。

問題の所在でも明らかにしたように、私は、教育は、人間が学ぶことを通して人間になることに、他の人間がかかわることである、ととらえている。まずこのことを確認したうえで、これを図で示すと、次のようになるであろう。



全体が球となっており、左図はその断面である。

A1 受胎の瞬間の子ども

A2 子ども

A3 おとな

A4 死ぬ瞬間のおとな

B かかわる者(教師、両親、市民)

AがA₁からA₄に変化していくに従って、Bも変化していく。

C 文化財

D 世界

Ground } 根源、存在そのもの
Root }

以下、ティリッヒの、教育に対する、キリスト教教育に対する、貢献と示唆を述べてみたい。

まず第一に、存在の基本的な構造からいえることは、次のようなことであろう。人間存在の場合は、動物や植物の場合とちがって、自己-世界構造は、相互依存性にとどまらないうで、環境を超越し、自己を超越することができるということである。動物や植物の場合でさえ、環境のみの制約によって存在するのではなく、環境との相互依存性において存在するのであるが、人間の場合は、さらに相互依存性をもつきやぶって、環境を超越し、自己を超越して、存在するのである。従って、上の教育構造で図示したように、自己は、人間の場合、動物や植物の場合とちがって、A₁からA₂、A₃へそしてA₄へと、その時の自己を超越していくのであり(Bにおいても同じである。)、

Dは環境ではなく世界といわなければならないのである。環境を超越し、自己を超越した、その最たる例は、前にも出したように、フランクルの『夜と霧』であろう。環境に閉ざされた自己、環境を克服できないものとしてみならず自己から、環境を超越していく自己、世界に開かれている自己が、人間存在の人間存在たる最も基本となることを、ティリッヒの存在論は示してくれているといえると思う。このような自己超越・環境超越の人間存在論が、教育の基本として、教育にかかわる者の視野におさめられなければならないであろう。

第二に、存在の特徴からいえることは、次のようなことであろう。存在はそのなかに非存在を含むというのが、つまり、存在は有限であり、このことを自覚している時、人間は不安を感じるというのが、ティリッヒの存在理解・不安の理解であるのだが、このような存在理解・不安の理解は、教育において、とても大切な示唆を与えてくれるのではないだろうか。人間存在から不安をとりのぞくことが、教育においてなされるべきことではなく、人間存在においては不安は勇気でもって肯定されるべきこととみなされなければならないということになる。そして、不安の概念と恐怖の概念のちがいについて前述したが、教育においては、あれやこれやの恐怖を対象療法的にとりのぞくことよりも（もちろん、このことは全然意味がないことではない）、人間存在である以上だれでも存在論的にかかえてまざるをえない不安と、どうなじんだり、どう対決したり、するかの方がより大事なこととなるであろう。恐怖をとりのぞく教育ではなく（そして、それは比較的容易なことであるが）、不安をも引き受けていく教育をすることが、より大切なことといえよう。

第三に、個別化と参与との要素、とりわけ人格と交わりとの要素からいえることは、次のようなことであろう。人間は、他の動物や植物とちがって、個別化においても参与においても、ラディカル（徹底的）でありえる。だから、人間は、人格であり、交わりができるのである。と同時に、自他共の人格を破壊することもできるのである。個別化をもっとおしすすめて、それを徹底したものが人格であるが、その人格はひとりだけで人格になる、人格であるのではなくて、参与を徹底しておしすすめた、他の人格への（からの）参与、すなわち、他の人格との交わりによって、人格になる、人格であるのである。これは、プラスの意味での人格や交わりが生じる場合であるが、人間

には、もう一つの場合、つまり、自らの人格や相手の人格も破壊する参与もありうる。しかも、動物よりも徹底した形において、破壊する参与もありうる。『組織神学』では徹底した表現ではなされていないが、前述したように、説教集『永遠の今』においては、徹底した表現でなされている。つまり、他の人格を破壊することは、自らの人格も破壊することになるのであるということである。自らの人格は破壊されないで、他者の人格だけを破壊することはできない。このことをどれだけ深く理解させることができるかということが、教育の質、キリスト教教育の質を決めることになるというよいであろう。上の教育構造において、 $A_1 \cdot A_2 \cdot A_3 \cdot A_4$ とBとの間で、 $A_1 \cdot A_2 \cdot A_3 \cdot A_4$ は、またBは、徹底的に人格でありえているか、人格になっているか、人格として認められているか、人格として他者を認めているのか。そして、そのことは、 $A_1 \cdot A_2 \cdot A_3 \cdot A_4$ とBとの間で、交わりが成立しているかどうかと深くかかわっているのである。相対的な形では、AとBとの間にも、人格を認めあい、交わりは成立するが、徹底した形で、人格にさせられ、交わりが成立するのは、GroundとA、GroundとBというように、Groundと相対さなければ、徹底した形で的人格も交わりも成立しないといえよう。Groundは、私達に、人格の問題、交わりの問題を考えずにはおれないようなありようで、私達にせまってくるものとしての存在である、といえる。

第四に、力動性と形式との要素（生命力と志向性との要素）からいえることは、次のようなことであろう。人間存在の時間的存続（人間の発達）とは、力動性と形式との交互性の連続ということではないのか。形式がなければ、存在者は存在しえないからして、存在していることは形式をもっているのであるが、その形式を、存在者の内部にうごめいている力動性（衝動）のようなものがつき動かして新しい形式をうもうとする。そのことによって以前の形式はこわされ、新しい形式が生じてくる。しかしまたふたたび、力動性によって、その新しい形式もこわされ、さらに別の新しい形式が生じてくる。力動性の要素は自己超越として働き、形式の要素は自己保存として働く。上の教育構造の図でいうと、 A_1 が A_2 になりそして $A_3 \cdot A_4$ に変化していくのは（発達していくのは）、力動性と形式との要素の絶えざる交互の連続であるといえよう。そのことは、Bにおいても同様である。

第五に、自由と運命との要素からいえることは、次のようなことであろう。運命という制約を無視できる自由など存在しない。そして、その自由は、熟

慮すること、決断すること、そして決断に関して責任をもつということであった。これは、とてもおもしろい指摘であると思える。無制約なバラ色の自由はなく、もし自由を行使できるとすれば、熟慮すること、決断すること、そして決断に関して責任をもつことにおいて、行使できるとするのは、教育において、キリスト教教育において、とても大切なことになるし、ならなければならないのではないかと思う。上で示した教育構造においていうとすれば、Aにおいて、熟慮し、決断し、責任をもつことができるような存在であるように、教育は、キリスト教教育はなされなければならないし、Bも自ら、熟慮し、決断し、責任をもつ存在でなければならないし、そういう存在としてAとかかわらなければならない。

ティリッヒの存在論を手がかりとして、教育における、キリスト教教育における、人間存在のありようへの、ティリッヒの貢献と示唆を、私は、以上のように考えた。

以上は、昭和59年の第27回教育哲学会全国大会でパウル・ティリッヒ研究(Ⅷ)―「存在 (being)」について―と題して口頭発表した原稿に、加筆したものである。

(注)

- (1) Paul Tillich, Systematic Theology, p. 171 『組織神学 第二巻』新教出版社 p. 235 この論文において以後この著作を引用する場合は、A (邦訳の場合はA) であらわすことにする。
- (2) Paul Tillich, The Courage to Be, p. 179 ティリッヒ著作集第九巻 白水社 p. 194 この論文において以後この著作を引用する場合は、B (邦訳の場合はB) であらわすことにする。
- (3) Paul Tillich, Love, Power, and Justice, p. 38~ p. 39 ティリッヒ著作集第九巻 白水社 p. 247
- (4) Paul Tillich, The Eternal Now, p. 153 ティリッヒ著作集別巻一 白水社 p. 312

(1985年1月31日)